

Re:ゼロから始める魔 女教会談

傍観者×

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如コンビニ帰りに異世界に召喚された引きこもり学生の菜月昴。その昴を3章くらいから苦しめてきた魔女教大罪司教が一度に集まり近況報告?的なことをしたらどうなるかという話です。幼女使いナツキスバルに倒された大罪司教怠惰担当ペテルギウス・ロマネコンティはまだ生きています。ただ大罪司教同士が話している姿がほとんど描写がないため筆者の創造になります。そういうのが苦手な方は回れ右でお願いします。

魔女教の中核の人物パンドラが大罪司教全員に招集をかけたことから物語が始まります。

目次

魔女教会談	1
シリウスちゃんはヤンデレ系乙女（おつ おんな）	7
史上最低の女子会	13
狂人とクズの本懐	34
空腹の逢瀬	52

魔女教会談

1 話

魔女教徒

その名前を聞くとあるものは関わりを避けようとし、あるものは顔をしかめ、またあるものは怒りに身を焦がす。このルグニカにおいて、いやこの世界において魔女教徒と聞いてよいイメージを持つものは一人もいない。

曰く 嫉妬の魔女サテラを崇拜し、サテラ復活の為ならどのような非人道的なこともする狂気の集団。

曰く 嫉妬の魔女と種族が同じのハーフエルフを憎み、ハーフエルフやそれ以外のすべての生き物を殺すことに何の躊躇もない集団。

曰く 嫉妬の魔女サテラ以外の魔女を認めず、サテラ以外の魔女の遺産が出てきたら、回収の過程でその都市を滅ぼすことすらいとわかない集団。

曰く 剣聖にすら匹敵するほどの実力を持つ集団

その魔女教なかでも大罪司教と言われている魔女教の幹部は人災の象徴ともいわれ、大罪司教が1人いるだけで三大魔獣と同等もしくはそれ以上の被害をもたらすと言われている存在。

それほどの存在でありながら大罪司教の情報はいまのところ2人分しかない。

1人は怠惰担当。魔女教の襲撃の半分以上に加担していると言われている。

もう1人は強欲担当。怠惰に比べると活動頻度は全然少ないが、ルグニカ王国の南にあるヴォラキア帝国を英雄八つ腕のクルガンを含めてたった1人で攻め落としたほどの力の持ち主。

その魔女教の大罪司教全員が勢ぞろいしているこの空間は異様ともいえる。

場所は嫉妬の魔女サテラが封印されている極東の大瀑布に最も近い場所。

アウグリア砂丘の中にある周りを見渡しても他の家が一切見えないような場所。

その中で一番に口を開いたのは一見何の変哲もない人物だった。

細身の体つきに長くも短くもない白髪髪に普通の顔付き、街中で遭遇しても10秒程で忘れそうないかにも汎用な見た目の男だった。

「それでパンドラ様？僕とそれ以外の司教を呼んで何の用かな？もし大した用事もないのに呼んだっていうならそれは僕が花嫁たちと一緒に過ごす安定した時間を奪う行為、強いては僕の数少ない権利の侵害になるんだけどそここのところ理解してる？」

魔女教大罪司教強欲担当 レグルス・コルニアスの恐喝ともとれる発言に特に気分を害した様子もなく、パンドラと呼ばれる女は笑みを崩さずに答えた。

「はい。実は皆さんに集まってもらったのは私の持っている福音書の原書にもうすぐ大罪司教が欠けるといふ記述が浮かんでいたので気を付けてほしいと思ひまして……」

「なんと、福音の言葉は魔女の言葉。魔女の言葉に答えてこそその愛、愛、愛愛愛愛愛愛愛愛いいいいいいいい 魔女の寵愛に報いなければあ」

パンドラの言葉をさえぎって言葉を発したのは病的なまでにやせ細り、両手の指には生々しい噛み傷がある緑の髪の男

大罪司教怠惰担当ペテルギウス・ロマネコンティだった。

ペテルギウスの狂気ともとれる発言に顔をしかめたのはレグルスだった。

「ねえ、今さあ僕がパンドラ様に集まった理由を聞いていたわけじゃん。そこに横やりを入れてくるっていうのはちよつと違うんじゃないかな？それって僕のことなんかとるに足らない矮小な存在だつて間接的に言ってるってことだよな？多くを望まない無欲で完結された存在である僕だけど、さすがに誰かの話を聞く権利すら無視されるのは納得できないね。挙句に僕は君と同じ大罪司教なんだけど？君の頭がおかしいのも魔法に盲目的で依存的な愛を抱いてるのも知っているけど、僕の権利を侵害していい理由にはならないよね？」

「私の魔女への愛を冒頭しますか？アア… 脳が震えるう…」

レグルスが地面を蹴り防御不可能の攻撃を加えようとし、ペテルギウスが見えざる手で応戦しようとした。

両者の間に一触即発の空気が流れたその時

「ペテルギウス・ロマネコンティは私の発言をさえぎらなかった。」

パンドラがそうつぶやいた。その時両者は何事もなかったかのようにしていた。

そしてパンドラはレグルスを背後から襲おうとしていた女に声をかけた。

「これでレグルスとペテルギウスが争う理由はなくなりました。だからあなたも奇襲なんてして無駄に争いを生む必要なんてないのですよ。シリウス」

パンドラが声をかけたシリウスはまさに魔女教大罪司教憤怒担当にふさわしい憤怒の表情を浮かべていた。

シリウスちゃんはヤンデレ系乙女（おつおんな）

憤怒の表情を浮かべるシリウスを見ながらパンドラは思った。

魔女の祠でサテラの封印を解くためにもあの英雄の坊やラインハルトを必ず殺す必要がある。

そのラインハルトを殺すにも戦力の低下は避けたいからこうして集めたんだけどなかなかうまくいかないわね

まあ福音書に大罪司教に選ばれる奴なんて元から人格や性格なんてどうに破綻している場合が多いから仕方のないことね…

むしろまともな思考してる人なんて魔女教にはいないわ。

それこそ魔女教の口伝で並行世界にあると伝えられているアクシズ教にも匹敵する

異常度だと私は思ってるわ。

さて思考が脱線してしまったね。

シリウスの憤怒をどうやって収めようかしら、、、

私の真実の言霊は強い意志を言霊にのせることで真実を捻じ曲げることが出来る。

しかし、シリウスの場合ペテルギウスへの盲目的な愛が原動力で魔女教の活動をしているようなものだから

私の権能で憤怒を捻じ曲げたらそれはシリウスの生きる力、生きる意義を奪い、最悪この場で自害してしまう可能性がある。

戦力低下を避けるためにこうして無理にでも集まってもらったのに今ここでシリウスが自害すれば集まった意味がなくなる。

かといってこのままレグルスに襲い掛かれば間違いなく殺される。

レグルスは行動や言動はアレだが権能“獅子の心臓”により自身の時間を停止することができる。

それにより疑似的な無敵を作り出すことに成功し、歴代の大罪司教の中でも最強の部類に入るでしょう。

シリウスの権能“体感覚の共鳴”も影響力や範囲は強いんだけど獅子の心臓とは相性が悪いわね。

「シリウス？何をしているのデス」

パンドラがシリウスをどうしようか悩んでいるときにペテルギウスが骸骨のように

ペテルギウスの狂信的ともとれる発言にシリウスは

やはりペテルギウスは愛情が深くて一途で素敵だわ・

その愛が私に向いてないのには憤怒しますが、クソ忌々しい売女魔女が復活さえしたら私の方がいい女だつてことをわからせてやればいい。

それに私とペテルギウスの中を裂こうとするなら復活してもそのあと殺してしまえば何の問題もない。

愛していた糞魔女サテラを失つて傷心する可哀想なペテルギウス。

そのペテルギウスに寄り添う私。そうして2人の間には愛が芽生え・

キヤーーーーー

「／＼／＼わかりました。ペテルギウス　そうですね　憤怒なんてこの世で最も不要な感情。忌むべき感情です。人間の心は常に感情ありき、それならその心には常に嬉楽の感情であふれているべきですよね。」

その二人のやりとりを冷やややかな目で見つめていたのは全身を漆黒で覆われたドラゴンの姿をしていた魔女教大罪司教色欲担当カペラ・エメラダ・ルグニカその人だった。

そしてもう一人の大罪司教暴食担当ライ・バテンカイトスは我関せずでひたすら飯を平らげていた。

史上最低の女子会

パンドラが魔女教会談を始める少し前にさかのぼり・・・

「今日も有意義な愛の実験ができたわ。」

と魔女教大罪司教色欲担当カペラ・エメラダ・ルグニカは凶悪な笑みを浮かべていた。

カペラの言う愛の実験とは普通の人が見たら嫌悪するどころか吐き気を催すレベル

の人間の尊厳を踏みにじる行為だった。

馬鹿な男とクズ肉を愛し合わせ、その後お互いの両親を殺させそれを目撃させる。

それでも犯せるのかそれとも殺すのかクズ肉共がどういう選択するのか楽しんで仕方ねーです。

家族を殺された憤怒の情が勝ち、愛しているものを殺すのか、性欲が勝ちいろんな汗をまき散らしながらやっちゃうのか楽しみだったのです。

結果はまあワタクシが予想してた通り性欲が勝っちゃってます。

それにしても男の

「両親を殺したのは許せないし、君は一生その罪を背負っていくんだ。もちろん僕も君の両親を殺してしまったことを一生後悔する。しかし、それでも僕は君のことを愛しているんだ。結婚しよう ミッシェル。お互いの家族はもういないけど僕らが家族になつて悲しみを癒そう。」

には最高に笑わせてもらってます。

ぎやははははっ！

クズクズクズクズクズ肉が 愛なんて口にして結局やりたいたいだけじゃねえか。どれだけ愛の言葉を囁こうが愛を表現しようが最終的にはやるんだ

ろうが。それを上つ面だけの愛などという言葉で表現して、いい子ぶってエロいことなんて興味ありませんみたいな顔しあがってよ。そのくせ頭の中じや常にエロイこと考えてるくせによ。そういう上つ面だけの愛を囁いてるやつを見るのがワタクシは一番腹が立つんだ。だけどそいつら上つ面かなぐり捨て夢中でやるのを見るのが一番好きなんです。どれだけ上つ面の言葉を並べようと人間の本質である屑な部分も、愛は性欲を満たすための便利な言葉に過ぎないということも理解できちまうんですよ。これでワタクシも人間の理解を一步深めることができましたんだと実感できます。

他にも人間はいつからいつまで性欲を感じるのか疑問に思い、5歳以降の男女や60歳以降の男女を裸で部屋に閉じ込めて実験したり、親族同士で交配させたり、同性を好きになるか実験したり、どんなことがあつても君を愛すると誓うよと言っていたカップ

ルの女のほうの姿を豚に男のほうを猿にしてやったら殺し合いをはじめたよ……

あゝ醜い、醜い

でもそんな醜い死んだほうがましな人間のことワタクシはすべて大好きなのです。このワタクシが好いてどんな体にも変身できて、どんな変態的な欲求にも答えてやるです。だからワタクシだけを見る。他のクズ肉を見てもいいけど最終的にワタクシを見る。万人がワタクシを見て、ワタクシに興味を持つようにワタクシの体をその人の最も性欲を刺激する姿にほかのクズ肉を豚や蠅、ゴキブリなど人間が嫌悪する姿に変えてワタクシの価値を上げ上げ上げ上げ上げ、クズ肉の価値を下げ下げ下げ下げ下げワタクシだけを見るようにしてやる。

すべての実験も終わり実験の結果と自身の考えを語っていたカペラだったが扉の前で訝しげな顔をし、

「それでワタクシの愛の研究室に何の用でいやがります？大罪司教さん
あいにくと大罪司教を招いたつもりはないんですがね？ライか？それともシリウス
か？」

カペラの問いかけに対して

「カペラさん こんにちは ご機嫌はいかがですか？」

扉を開きながらシリウスは答えた。

「それにしてもよく私だつてわかりましたね。まああのライの餓鬼と間違えられたのは不愉快ではありませんが」

「なあゝに簡単な推理だよ。シリウス君

魔女教徒は魔女の残り香を感じることができる。そしてその感じ方によつてだいたいの魔女の寵愛度がわかる。ワタクシが感じた寵愛度は大罪司教クラスだった。そしてここに来る可能性がある大罪司教は君か暴食のライ君くらいしかいないというわけさ

自己愛の塊のナルシストバカはわざわざこんな花嫁のいそうにない、それどころか人がいそうにないところには来ないだろうしね。あの勤勉な狂人君もこんなところで哲学に興じている暇はないだろうしね。パンドラさんはそもそも権能で魔女の残り香でてないですし・・・」

カペラの推理にシリウスは

ああ、ペテルギウスって名前かっこいいな、

ペテルギウス・ロマネコンティと結婚したら私もシリウス・ロマネコンティになるわね、

それにしてもカペラって敵になると屑みたいな戦術使ってきて本当にうつとしいけど味方だと話し方がユーモアで面白いわね。一応同性だしあのことを話してみましようか……

「あの……」

シリウスが話そうとしたちやうどその時に

「それでシリウスはどうしてここにきたんです？」

シリウスが決死の覚悟で話しかけようとしたときにちやうどカペラが問いかけてきてシリウスは焦りと緊張で早口になってしまい

「・・・ウ・・・を・・・れば・・・か？」

シリウスの小さくて早口な言葉にカペラは

「はあ？もう一度言つて・・・いややっぱいいですわ。そもそもワタクシが聞く義理もねえんですし今 愛の実験のまとめと考察、結果を踏まえての次の実験の準備で忙しいのでさようなら。」

「待つてカペラ。カペラが研究している愛の分野に関係があることなの。私はペテルギウスを10年近く愛しているの。でもペテルギウスが私の愛に少しでも気付いてもらうにはどうすればいいと思います？」

シリウスは顔を真っ赤にしてカペラにそう尋ねた

シリウスの問いかけにカペラは

「そりゃあ やつちまうしかないでしょ？ 襲って押し倒してやることやつちやうしかないでしょ」

「……つつつ／＼な、なにを言っているんですか／＼」

カペラの葉に布着せぬ言い草にシリウスが顔をリングのように真っ赤にしていた。

「そういう汚らしい行為ではなくて・・

確かにペテルギウスとの愛が成就したらそういうこともするかもしれないけど・・
まだそういうのは早すぎます・・・

とにかくもつとさりげない感じのアプローチでお願いします。あ、そうだもしカペラが好きな人できた時にどうやって気を引きますか？」

シリウスの質問にカペラは一瞬あっけからんとしたがすぐに

「ワタクシですか？そうですね。ワタクシならまずは相手の一番性欲がそえられる顔、表情、仕草、声、服装、目線にしてワタクシ自身の価値を高めその人の近くにいたるワタクシ以外の異性を全て芋虫に変えますね。ワタクシしか選べないという状況を作り出し、ワタクシしか見ないようにワタクシにしか興味を持たないようにしますね。」

カペラの常人が聞いたら発狂しそうな思想にシリウスは

「そうですね。確かに自分以外に興味、好意を向けられなければそもそもほかのクソ魔女やクソ精霊に憤怒する必要もないですからね。でも実際にペテルギウスの興味は忌々しい魔女のほうに向いていて私のほうには興味をほんのほんの少ししか向けてくれない。今まではそれで満足していました。でもそれだけではやはり不安になるのです。物足りないと感じてしまう私がいるのです。どれだけ半魔を真つ二つに引き裂こうが、どれだけ精霊を燃やし尽くそうとも全然私の憤怒が収まらないのです。ああ

このままじゃ面倒くさいことになりそうですね。とりあえずシリウスの気を逸らすとしましょうかね

「シリウス やめるのデス」ニコッ

憤怒に身を焦がしていたシリウスは突然の愛しのペテルギウスの声で正気に戻りペテルギウスの笑顔を見て

「ペ、ペ、ペテルギウシユ いらやしてたんでしゆか？／＼
それならそう言ってくださいやいよ」

シリウスは嘸み嘸みになり、それでいて顔がじわじわと紅く染まっているのが自覚できた。

そんなデレデレのシリウスに対し、気持ち悪いほどの笑みを浮かべたペテルギウスは

「クスクスクス　シリウスちゃんペテルギウスだと思った？　ざんねくん　ワタクシごとカペラ・エメラダ・ルグニカちゃんです。」

突然ペテルギウスは顔の、いや体の輪郭が粘土のようにふにやふにやになり金色の髪の毛の童女がいや悪女がドヤ顔で立っていた。

「・・・　ああカペラの変身能力ですか」　ガクツ

シリウスはガクツとうなだれていたが

内心で本物のペテルギウスもいつかあんな風に私の側で笑って欲しい　と考えていた。

そしてカペラの行動についてシリウスが感じたのは憤怒の情は1割で残りの9割は

ペテルギウスの笑顔を見せてくれたことへの感謝だった。普段のシリウスなら自分の心を弄ばれて間違いないで憤怒していただろう。しかしペテルギウスの笑顔を見られて心がのぼせてしまっていたのだらう。それほどまでにペテルギウスに恋焦がれていた。恋する乙女（笑）は強いのだ

「カペラ また話に來てもよいでしょうか？」

「いいですよ。というかなんですか？いきなり改まって今日だって特に約束せずに来たじゃないですか？このシリウスさんは」

シリウスは少し嬉しそうに頬を緩ませていた。

そしてシリウスはカペラと話し相手、否友達になりたいと思った。

「カペラ 私とお友達になってくれませんか？」

シリウスは自然と言葉が出てきた。その直後体から嫌な冷や汗が滴り落ちた。そして、心なしかいつも体に巻き付けている鎖がいつも以上に冷たく感じた

カペラに友達になって欲しいと告げてからどれほどの時間がたっただろう。10秒？1分？体感時間では何時間にも感じられた。

そんなシリウスの緊張とは裏腹にカペラは少し考え、答えた。

「いいですよ。シリウスさんと話しているとなかなか楽しめるので」

シリウスは嬉しかった。久しぶりにできた友達だから。今までは友達が出来ても私が魔女教徒だと知ると恐怖して逃げていったか、利用しようとしてくる連中ばかりだった。もちろん恐怖して逃げたり、利用しようとした人たちは共感覚で騎士を殺させた後に自害させたりペテルギウスの指先に加えたりしましたがね。彼らも魔女教徒のため

に働いて、死ねて満足しているでしょう。

「ただしこちらからのお願いが1つあります。

いいですか？」

「なんですか？」

シリウスはソワソワしていた。カペラのお願いつてなんだろう？余程の事じゃなかったら聞いたあげたいけど、もしペテルギウスを私に下さいとかだつたらいくらカペラといえど譲れないし友達も解消になる。それどころかここで殺し合いになつてしまふかもしれない。ペテルギウスはカツコイイからもしかしてたらカペラも惚れたのかな？せつかく友達になりそうだったのに殺しちゃうのは嫌だな・

「もしペテルギウスとシリウスの子どもができたらワタクシに下さい。」

「いいわよ」

「別に無理にとは言わな・・・え？　いいの？」

「ええ　そんなことでいいなら全然いいわよ。いくらでも上げるわ。」

小さい子どもと言えどカペラ・エメラダ・ルグニカの愛の探求を前には関係ない。体や心　いや人間としての尊厳を弄ばれるだろう。普通の親ならまずこんなことは言わないだろう。さすがのカペラも血の繋がった親子を実験するのは躊躇したのかももう一度聞き返した。

「本当にいいんですか？」

実際に実験の終わったあとにイチヤモンつけられて殺し合いになったら面倒だし

ね・・・

ね。それにシリウスが本気で共感覚を広範囲に張ったらワタクシの実験も難しくなるし

子どもの心配ではなく自分の心配をしていた。

そんなカペラの問いかけにシリウスは

「本当に構いませんよ。そもそも子どもが生まれたらペテルギウスの好意が子どもに向けられるかもしれないじゃないですか。そうなったらせつかくの私の、私だけとペテルギウスになったのに、もう憤怒せずに楽しい感情だけで生きていけると思ったのに、子どものせいで憤怒しなきゃいけないんじゃないですか？それに小さい子どもは嫌いなんですよ。共感覚で命令しても理解できない場合が多いし、すぐに憤怒も冷めちゃうから嫌なんですよね」

シリウスの主張にカペラは笑みを浮かべて

「じゃあ契約成立ですね。

機会があればまた話しましょう。ペテルギウスとシリウスとワタクシの3人が揃う機会があればシリウスの恋の応援させてもらおうですね」

大罪司教同士の子どもには権能が宿るのかどうかも気になっていたんですね。いいサンプルが手に入りそうです。それにうまく利用すれば怠惰や憤怒という手札を手に入れられるかもしれないな。手札は多いに越したことはないからね。

カペラは愛の研究室でのシリウスとのやりとりを思い出していた。

そして、カペラはペテルギウスに声をかけようと・・・

狂人とクズの本懐

「ペテルギウスアンタは何の為に戦っていやがるんですか？」

唐突なカペラの質問にペテルギウスはゆっくりとカペラの方を向き

ただでさえ大きい瞳を眼球が飛び出そうなほど ギョツ と目を見開き

「なんのため・・・」

なんとため と今言ったデスか？

そんなのサテラへの愛に決まっているのデス。サテラへの愛は絶対なのデス
愛に愛に愛にサテラへの愛に報いなければあああああああああ

ペテルギウスの狂氣的な愛の叫びにそばに座っていたシリウスはサテラへの憤怒の
情を燃やし、カペラは目を冷やややかに細めて

「ペテルギウス、お前のそれは愛でも何でも無い。ただの妄執と依存だ。他の奴の前ではいい。だが愛と色欲を司るこのカペラ・エメラダ・ルグニカの前で二度とその汚い感情を愛だと名乗るな。クズ肉がッ」

カペラが吐き捨てるように言うとペテルギウスの体が痙攣を起こし

「あ・ああ・」

壁に頭を叩きつけながら

「私の 私の魔女への愛が偽りだと・・・それはありえないのデス。怠惰であることは最も唾棄すべき事柄、ゆえに私は勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉にこなししてきたあああああああつー！」

愛とは勤勉に行動し 勤勉に働き 勤勉に尽くして 心も体も勤勉に尽くしてきた 勤勉にしていたものこそがあああああつー！

得られるのデス。証明できるのデス。

愛の研究者を自称しながらそんなことも理解できないなんて

あああ アナタ怠惰ですね？」

「はああ」

ペテルギウスのおぞましい心の叫びにカペラはため息をついて自らの体に手をあてて

「ペテルギウス……」

カペラの姿が黒龍から銀色の髪をした長い耳が生えているハーフエルフに形を変えた。その姿は400年前に剣聖と龍と賢者シャウラに封印された嫉妬の魔女サテラという二つだった。

「ギャハハハハ」

どうですペテルギウス ムラムラきましたか？この姿に

押し倒してえと思ったのかよ？やりてえと思ったのかよ？欲情したか？勃起したか？

もししてねえならてめえのそれは愛でもなんでもねえただの勘違いだよ？そのことを理解もせず認めることも出来ない

それが存在自体も中途半端なてめえにふさわしいよ。この頭の沸いたクズクズクズクズクズクズクズクズクズクズクズ肉があつ」

ペテルギウスはカペラの遠慮などという言葉が一切入る余地のない言葉の暴力に、5本の指を生暖かい口の中に全部突っ込んで噛み潰した。

指からは大量の血液が滴り落ち、指からは白い骨のようなものが見えていた。

ペテルギウスは特に傷を気にした様子もなく、痛みに顔を歪ませることもなく、全部の指を噛み潰すと壊れた人形のように震え、

「・・・ささないのデス。

サテラを冒流することはあああああつ！

誰にも許さないのデス。

「ここまで・・・」

ここまで本気で殺したいと思ったのはエキドナ以来初めてなのデス。

コロシテヤル」

ペテルギウスの言葉にカペラは再び自分の体に手を当て白髪の女 エキドナに変化し、凶悪な笑みを浮かべ、

「きあがれってんですよ ペテルギウス

凶星をつかれ、顔真っ赤にしてる童貞なんて気色悪い ワタクシがその無駄な命終わらせてあげますよ」

「見えざる手え！」

「ギャハハハ」

「パンドラ様 アレ止めなくていいの？」

怠惰と色欲の激突を眺めていたパンドラにレグルスが特に気にした様子もなく話かけた。レグルスの発言にパンドラは意外に思ったのか

「あら？レグルス　もしかして仲間を心配しているの？」

パンドラの発言にレグルスは顔をしかめ、

「まさか、奴らがどうなろうとしたことじゃないよ。僕が動くのは顔が可愛い花嫁を見つけたときと僕の権利を侵害した時だけさ。無欲で安定した生活を求めているからこそ僕にこの権能がついたのだと思うよ。人は自分の器以上のことをしようとするからこそ危機に立たされ、最悪の場合は命を無駄に落とす。僕のように無欲で自らの器を理解しているからこそ僕は生まれてこのかた危機というものを味わったことがない。当然だよ。この権能があれば剣聖だろうと龍だろうと僕に勝つことは不可能。無欲で安定した生活を求めている僕はそんなことをしようとは思わないけどこの権能があれば世界征服だつてできるよ。」

そうじゃなくてパンドラ様は戦力低下が嫌でこの会議を開いたんでしょ？止めなくていいの？別に愚図のペテルギウスが死のうと淫売女が死のうと僕の知ったことじゃないけどこの会議に僕を呼んだ以上きちんとしてもらわないと僕の質が疑われちゃうだろ？

もし力がないっていうなら力を貸してあげるよ。君には花嫁を何人か見つけてもらった借りがあるしね。小さな借り1つ返せない小さい男だと思われるのも僕の心が傷ついて殺してしまうかもしれない。やつはりどんな人間だって懸命に生きているんだ。だから僕もその命を絶つことはしたくないからね。」

レグルスの矛盾だらけの自己中心的で身勝手な弁舌にパンドラは特に表情を変化させることなく

「カペラの方に殺意はないですね。まあ見ていればわかりますよ。」

と意味深に答えるのみであった。

パンドラの言葉にレグルスは鼻を鳴らし、怠惰と色欲の方に視線を向けた。

怠惰は自傷行為をした頭と指以外はほぼ無傷であり、

色欲は手が一本抜けていて体のいたるところに木刀で殴られたような打撲痕があった。

「カペラ 私の愛が偽りだというあの言葉を撤回してもらいたいのデス。

そうすればアナタの怠惰を許し、水に流すのデス。あなたも私と同じ魔女教徒。

魔女の信愛、寵愛、敬愛、純愛に、愛に愛に愛に愛によつてえらばれたもの。愛に、愛に報いなければあああつ！」

ペテルギウスの否 狂人の甘言にカペラはペテルギウスに負けず劣らずの凶悪な笑みを浮かべ

「ワタクシは何もまちがったことはいつてねえです。お断りですね。この短小の童貞やろうがつ！」

「つつつつ

死ねええええ

見えざる手えええええつ！」

カペラの挑発に対し、ペテルギウスは本気でカペラを殺そうと思い、頭と胴体をバラにする気で見えざる手を発動した。

見えざる手がカペラに当たる瞬間シリウスがカペラの前に立った。ペテルギウスは見えざる手の速度を緩め、シリウスに当たる瞬間に止まり、見えざる手を消した。

「シリウス なんのつもりデスか？」

シリウスを睨みつけながらペテルギウスはやや棘のある声で言葉を発した。

「すいません アナタ しかし気持ちがいずれ違ってしまうのは悲しいものです。やはり愛とは人と人が気持ちを共有することで育まれるものだと思えます。ですからカペラさん、ペテルギウス すいません。これは私の自己満足です 許してください 憤怒の権能 カペラ ペテルギウスの感情を共有」

「あああああああ………」

カペラ・エメラダ・ルグニカはペテルギウスの魔女への愛
愛に報いるために全てを
捧げる感覚を味わい、

ペテルギウス・ロマネコンティはカペラの愛の実験の内容
愛は性欲だということを
嫌というほど見せられた。

1分という短い時間ではあったがペテルギウス・ロマネコンティとカペラ・エメラダ・
ルグニカはお互いの愛について感じる感覚を共有していた。

確かにこれだけ愛の実験の結果を見せられては愛は性欲が絡んでいるということも少しは認めなければならぬのデス。

しかし・・・

まさか性欲なしであそこまで行動できるやつがいるなんて愛は性欲以外にも一応形はないこともないってことですかね？

でも・・・

「あなたのことが好きになれそうにないデス」
「ワタクシはアンタのことが大嫌いです」

ペテルギウスとカペラの和解、否お互いが分かり合えないということに関する和解が成立した時にペテルギウスにギュッと抱きついていた憤怒の主がそこにいた。

「シリウ・・」

「好きです。ペテルギウス」

ペテルギウスが言葉を発する前にシリウスが告白した。

空腹の逢瀬

「好きです。ペテルギウス」

「シリウス・・・それはどうい・・・」

「あなたのそういう一途にして一生懸命なところが好きです。」

「一人の人間として」

シリウスは顔を赤らめてそう早口で告げた。

ペテルギウスに好意があることは伝えたからこれは立派な告白です。

うう・・・一応告白はしたけど恥ずかしくてしばらくペテルギウスに合うのは難しそうです。とりあえず告白はしたのでカペラさんにどや顔してそのあとで頭を下げた。

「ありがとうカペラさん アナタがペテルギウスの心の中に踏み込んでくれたから私はこうして告白することが出来ました。

でも恥ずかしいのもう出ていきますね／＼」

カペラに近づいて小声で早口でそう告げるとシリウスはパンドラへ別れの挨拶を告げささつと出ていきました。

シリウスが出ていくときにペテルギウスは声をかけた

「待つのデス シリウス」

ペテルギウスはシリウスから告白？的なものを受けてからずっと下を向いて考えていた。

「魔法の寵愛を得るために、魔法の愛を、愛を愛を愛を愛を愛を得るために魔法の復活に尽力してきたのデス。

魔法の愛以外はいらない、魔法の愛さえあればそれでいい。

そう思ってきたのデス・・・」

ペテルギウスの発言を聞いてシリウスは表情に影を落とす、下を向いて体を震わせていた。

魔女への憤怒で

「魔女以外の他人の好意、愛など気持ち悪いだけそんなの要らない・・・」

そう思っていたのデス。ですがシリウスアタタの好意は向けられても嫌ではなかったのデス。

魔女教大罪司教のなかでは一番好きかもしれないのデス シリウス。」

ペテルギウスの言葉でリンゴのように赤かった顔を色素がなくなるのではないかと
思わせるほど紅色し、

「また今度会いましょうっペテルギウス／＼」

と早口で告げ、砂漠の中を猛スピードで走り抜けていった。

シリウスとペテルギウスの一連のやりとりを見ていたカペラは「はあああ」とため息を吐き

どうせならここで押し倒して子作りしろってーんですよ。

大罪司教同士のまぐわいや精霊の性交、欲情のポイントなどを観察したかったですかね……

まあシリウスという自由に使える駒を手に入れただけで良しとしますか。

それにしても魔女への偏愛しか示さなかったペテルギウスがあそこまで好意を示すなんてこれはひよつとしたらひよつとするかもしれないですねーです。

まあ何にしてもどんな結果になったとしてもワタクシの愛についての理解が深まればそれでよしです。

一方告白まがいのことをされたペテルギウスはシリウスが出ていった直後から思考を張り巡らせ続けていた。

シリウスの告白と世間一般でいわれるものに当たるのかは不明だが好意があるとい

うことだけはわかったのデス。

魔女以外の愛に、好意に興味など持たないつもりだったのデス。そのはずだったのデス。

しかし、シリウスに人間として好きだと言われた時に今までのサテラの復活の為の行動が無駄じゃないと言われたような気がして、肯定されたような気がして心地よかったのデス。これが愛というものなのでしょうか？

そのうちシリウスとどこかへ出かけてみたくなったり、逢瀬をしたくなるものなのですかね？・・・

分からないのデス 知らないのデス 理解できないのデス

汝に王選候補の半魔への試練を命ず

全体が真つ黒で薄気味悪いオーラを放っている福音書に赤い文字で
そう記されていた。

それを見た瞬間ペテルギウスは頭を机に激しくぶつけながら自らの行いを後悔した。

何も考えず何も行動しないのは怠惰であり、考えることは勤勉なことですが、考え過ぎて動けなくなり、何もしないのは結局怠惰なのデス。怠惰は悪、怠惰は極悪の極みなのデス。怠惰たるものに愛は訪れないのデス。魔女よ、どうか、どうか怠惰なるこのワタクシをお許しください。勤勉に勤勉に努めなければ

シリウス 福音書に文字が記されたのでこの通りにしないとイケなくなったのデス。福音書は魔女への愛は絶対、絶対なのデス。

この王選の半魔への試練が終わったらシリウスと語り合おうのデス。分からないことをわからないままにしておくのは怠惰の極みなデス。私は全てに勤勉に、そう勤勉にしなければ……

ペテルギウスはパンドラに試練を遂行するために会談を抜ける旨を伝えて出ていった。

最も会談の体をなしていたのかは不明であるが……

告白まがいのことが終わり、走って出ていったシリウスは夜の星を見ながらペテルギウスの言葉を脳内に反芻していた。

「大罪司教の中で一番君のことが好きだ。シリウス

結婚しよう。しかしサテラが復活するまで式を開くことが出来ない。だから魔女復活まで結婚は待つてほしい・・・」

はいペテルギウス私も待つています／＼

少し、いやかなり記憶が改ざんされていた・・・

シリウスが星と黄昏ながら回想に、いや妄想にふけつているときに後ろから気配を感じ、振り向くとそこには凶悪な笑みを浮かべた、子ども否魔女教大罪司教暴食担当ライ・バテンカイトスその人が立っていた。

その容姿は小さく童女を思わせるような体格だったが、顔は凶悪犯のような笑みを浮かべており、体格と顔がミスマッチし、ちぐはぐな気持ち悪さを醸し出していた。

その瞳はまるで子どもが甘い、甘い好物のチョコレートを見るようなそんな目をシリウスに向けていた。

シリウスはライ・バテンカイトスを見た瞬間顔を歪め、

「何か用ですか？ライ

今愛しのペテルギウスの思い出を反芻しているので早くしろよ」

シリウスの邪険に扱うような態度に特に気にした様子もなくライは

「僕だつて好きで話しかけた訳じゃないし、パンドラ様とカペラに頼まれて君に對話鏡を届けに来ただけだし・・・

そもそも君がペテルギウスを好きだなんだという話には興味がないよ。

そんなことを考えても、誰かを好きになつても、愛情も友情も恋も愛もなんもかんも

すべて食べ物をおいしくするスパイスさ。」

ライの発言にシリウスは

「愛の何たるかもわからない糞餓鬼がつ！そんなに食欲を満たしたいなら土でも食つてろぼけがつ！」

シリウスの吐いて捨てるような言い草にライは怒るでもなく悲しむでもなく、ただ次の食事はどうしようかと、次の食事はシリウスの言っていた愛し合っている人を両方いつぺんに食べたなら美食になるのかななどと考えていた。

「シリウス 説教は俺たちは嫌いだし僕たちも嫌いだ。君の愛の価値観を否定する気もないし、かといって興味もない。俺たちの価値観をわかっているのは僕たちだけでいい

ああこの飢餓を満たしてくれる人間（食べ物）はないものか。ああ空腹は最高のスパイスという言葉があるけど常に空腹な僕らは常に最高の気分で俺らは食事をしていることになるんだろうね。

あまりの空腹で悪食のロイは土を食べたらしいけど美食家の僕はそんな気にならない。そもそも食べ物は有限なんだし美食にありつける可能性も有限。そんな中でおいしいと感じないものを食欲の為にただただ暴食するなんてもつたいないじゃないか！暴食も暴食も限られてるんだよ！その限られた中でおいしいものを食べない美食しないなんて損した気分になるじゃないか！」

そんな暴食まみれのライの意見を聞いてシリウスはペテルギウスの記憶の反芻（改ざん）をやめ、憎悪のこもった目をライに向け

「ライ・バテンカイトス私はあなたのことが個人的に大嫌いです。ペテルギウスは暴食にしか興味のないあなたのことを特に何も思っていないみたいですが私は嫌悪します。あなたのその食物を見る目を、あなたの暴食の権能を・・・」

が欠けるんでしょ。だからさシリウスもしペテルギウスが死んで死体回収出来たらその死体ちようだいよ！」

「勤勉なあの方が早々死ぬわけないじゃないですか

それにもし仮に死んだとしてもあなたたちなんか死体を渡すわけありません。死体も愛も永遠に私の物です。むしろ死体なら私から離れられない　フッフッフ…」

．．．

「とりあえず僕たちは対話鏡を渡し、俺たちは約束を果たした。

だからもう行くね」

ライの言葉に特に何も返さずシリウスもライと反対側の方へ歩いていった。

「さてこれでカペラの愛の実験で最も愛が深かったペアを食べられる。シリウスの話を聞いていたら僕たちも愛を食べたくなってきた。これが俺たちの食への愛なのかな？まあいいや」

「それではイタダキマス」